

書 評

西 真如. 『現代アフリカの公共性—エチオピア社会にみるコミュニティ・開発・政治実践』昭和堂, 2009年, 320 p.

宮脇幸生*

社会の二極化と「アンダークラス」の存在が問題となっている今日、「公共性」をめぐる議論は私たちの社会において、ますます重要性を帯びてきている。社会の資源をどのように分配するのか、それに対して人々が、いかにして権利を主張できるのか、だがこの「公共性」という概念を用いてアフリカ社会を分析するのは、決して容易ではない。なぜならこの概念自体、もともと西欧に成立した市民社会をモデルとした概念であり、通文化的な汎用性のある概念ではない。そのうえこの概念には、多様な価値観を許容し、非抑圧的な言説空間でのコミュニケーションによる合意をよしとするというような、ある種の規範性が含まれるからである。はたして「公共性」という概念で、アフリカ社会を分析することは妥当なのか、そしてそこから、社会についての何らかの意味ある展望を導くことが出来るのか。

本書で西さんは、エチオピアのグラゲ道路建設協会とアジスアベバの葬儀講の活動を分析することで、この困難な課題に取り組もうとしている。以下本書の内容をみていこう。

西さんはまず、「エチオピアはなぜ貧困を

解決できないのか」という、今日エチオピア人自身を悩ましている問いを提示する。そしてエチオピア（ひいてはアフリカ）が貧しい理由を、アフリカの「貧困の文化」や、市民社会の欠如に求めるようなスタンスを批判し、実際に抑圧や格差を是正するための実践的な行動に注目することを提案する。具体的な事例として取り上げられるのが、エチオピアのふたつの住民組織、グラゲ道路建設協会とアジスアベバの葬儀講である。西さんはこれらの組織の活動が、市民社会ともエスニシティとも異なる、対抗的な公共性を創出してきたのだという。

この対抗公共性という概念は、ナンシー・フレイザーが提起したものである。公共圏とは本来、多様な価値観を許容する自由な言説空間であるはずだが、社会的な不平等があるところでは、公共圏の討論のプロセスで従属集団の権利が奪われる可能性がある。そのため従属集団にとっては、オルタナティブな自分たちのための公共圏を作るほうが有利となる。対抗公共性とは、このようなオルタナティブな公共圏を作る動きのことである。対抗公共性は、支配的な公共圏との関係を拒絶するのではなく、その関係を変化させる点で、分離主義とは異なっている。それならば、支配的公共圏に抗してマイノリティのエンパワーメントを可能とするような対抗公共圏は、アフリカ社会では、どのような形で構成されるのか。

アフリカが貧困と紛争を解決できないのは、対立するエスニック集団によって国民が分断されているからであり、民主的な合意形

* 大阪府立大学人間社会学部

成を促進する市民社会が脆弱なためだという説明がある。他方でアフリカの社会原理として重要なのは、市民社会よりもエスニシティだという反論がなされたりする。市民社会かエスニシティかというこの二者択一の議論に対して、西さんが援用するのは、マムード・マムダニの議論である。マムダニは、アフリカは市民社会とエスニシティというふたつの公共性によって引き裂かれているのだが、重要なことは、そのどちらかを選ぶのではなく、ふたつを創造的に結びつける運動によって乗り越えることだと提唱する。西さんはそこで、従属集団による、市民社会とエスニシティを架橋する対抗的公共圏を創造する活動に注目することにより、新たな実践の可能性を探ろうとするのである。このような実践の可能性を示す事例として提示されるのが、グラゲ道路建設協会とアジスアベバの葬儀講の活動である。

グラゲ道路建設協会の活動は、1960年代のアジスアベバで開始された。グラゲはもともと、いくつかの出自や宗教・言語を異にする集団だった。19世紀末エチオピア帝国に征服されて以降、アジスアベバに移住して零細商業に従事するものが多数現れ、やがてエチオピア経済において重要な役割を占めるようになる。もともとはグラゲとは南方の粗野な異教徒を指す名称だったが、それが勤勉な商人というエスニック・イメージをもつにいたると、これらの人々も自らグラゲと名乗り、自分たちのエスニシティをアピールし始める。

1960年代のエチオピアでは、北部出身の貴族が南部に広大な領地を所有し、地方行政

も把握する一方で、アジスアベバには官僚や商人を中心とする市民階層も形成されつつあった。アジスアベバに移住したグラゲ移民で、市民階層に一定の地位を得た者のうち、サバット・ベットと呼ばれる地域の出身者たちにより、グラゲ道路建設協会は設立された。グラゲ道路建設協会のメンバーのうち官僚となった者は、帝国国道庁に接近し、援助を引き出すことに成功する。また道路建設協会は、グラゲを構成する諸集団の名を反映した支部委員会を農村に作ることで、彼らの活動がサバット・ベットに関係することを人々にアピールし、都市・農村から幅広い支持を獲得した。

当時のエチオピア南部では、貴族階層が富を独占し、地域の首長はそれに従属していた。だがグラゲ道路建設協会は、アジスアベバの市民階層と農村社会を結びつけることで、都市から農村への新たな再配分の回路を作り出したのである。ここで西さんが強調するのは、この運動が成功した理由は、グラゲという民族の結束の強さゆえではないという点だ。そうではなく、運動の主導者たちが、既存の権力配置に対抗し、都市から農村への再配分を実現するために、グラゲという集合的アイデンティティの再構成を行ない、活動への支持を取り付けてきたからなのである。この対抗公共圏は、市民社会とエスニシティを架橋するという形で、新たに創造されたものなのである。

グラゲ道路建設協会は、1980年代末までに、サバット・ベットの各地域を結ぶ幹線道路を整備した。それまで中央経済から孤立し

ていたこの地域は、道路の整備に伴い、商品作物の栽培が盛んとなった。だが道路の通行料金の問題をきっかけに、協会の活動は農村の若い世代の批判にさらされる。そしてEPRDF政権のもとでは「守旧派」のレッテルを貼られて、活動は停滞してしまう。しかし協会傘下の支部委員会の中には、独自の活動の建て直しをはかるものもあった。そのひとつが、エジャ開発委員会である。

エジャ開発委員会は開発の遅れているグラゲ県エジャ地域に、外国の開発援助資金などを利用して、高等学校を建設する。彼らの活動の興味深い点は、外部資金の獲得と同時に、草の根の支持を得ようとしている点である。アジスアベバにあるエジャ出身者の葬儀講会員たちとも交渉を行ない、資金を得ているのである。

西さんは、民族自決にもとづくEPRDF政権による民衆のエンパワーメントのあり方は、民族の自治と平等を追求すればするほど、逆説的に地域社会への強権的な介入を招くというジレンマをもつという。民族自決の思想は、民族自体を一枚岩的な存在として捉えてしまい、その中にある多様で異質な意見を抑圧する。それに対してグラゲ道路建設協会の活動は、一見すると明瞭な思想を欠くようにみえるが、都市の市民社会と農村の氏族制を結びつけ、交渉の場を設定した。またそれに続くエジャ開発委員会は、多数の都市住民が参加する葬儀講との交渉を通じて、自由な意見交換の場を設けている。このような柔軟で創発的な組織運営のあり方が、資源のより民主的な再配分を実現しているのだという。

本書の最後には、アジスアベバの葬儀講の活動が、もうひとつの対抗的公共性の事例として示される。アジスアベバの葬儀講は、農村での地縁や血縁から切り離された都市への移民が、孤独な死を避けるために組織したものである。もともとは故郷や母語を同じくする人々で構成されていたが、現在では宗教やエスニシティを問わない葬儀講が主流を占めている。葬儀講は参加者の積立金によって、死者の葬儀を行なう。だから積立金の確保と同時に、誰が葬儀講によって葬られるのかが、常に問題となる。西さんによれば、これらの葬儀講の活動で興味深い点は、葬儀講によって葬られるのが誰かという境界線が、常に揺れ動いているということである。たとえば、講の積立金を他者に横領されてしまった老人の葬儀を、その講は執り行なうのか。また講のメンバーのもとに一時的に滞在していた者が死んでしまった場合、彼はその講によって葬られるのか。福祉国家のような社会制度は、万民のニーズに対応するという建前を維持する一方で、現実にはさまざまな排除と選別を行なう。それに対して、葬儀講は誰をメンバーとし誰を他者とするのかという排除と配慮の作業を、自分たち自身で取り組んでいる。現実の公共圏が常に何らかの外部を前提として構成されているとするのならば、その境界線を問い直す作業は、そのメンバー以外にゆだねることはできないものである。アジスアベバの葬儀講の活動は、まさにそのようなことを私たちに教えてくれるのであると、西さんはいう。

以上かけあして本書の内容をみてきた。次

に本書を、エチオピアの人類学的エスノグラフィという観点と、公共性的人类学という観点から、それぞれどのような意義があるのかを検討してみよう。

エチオピアの人類学的エスノグラフィでは、1980年代のライティング・カルチャー・ショック以降、論集『帝国エチオピアの南部辺境』[Donham and James 1986]を嚆矢として、民族誌をエチオピアの政治経済の文脈に置きなおす動きが盛んになっている。また1991年以降のEPRDF政権による民族自治政策のインパクトを、それぞれの地域の民族集団から捉え返すという視点も重要性を増している。まずは本書を、これらの流れをおさえた最新のグラゲ民族誌として読むことが可能だろう。本書は、グラゲという民族アイデンティティの構築プロセスを、その歴史的背景を押さえつつ分かりやすく解明している。グラゲという民族のエチオピアでの重要性を考えるのならば、本書はエチオピア研究者にとっては今後必須の参考文献となるものだし、近代における民族アイデンティティの構築に関心をもつ人類学研究者一般にとっても、貴重な事例研究となっている。

他方で、個別の記述に立ち入るのなら、より突っ込んだ背景説明が欲しいと思われる箇所もある。たとえば、組織設立の背景に関して、たちまち以下のような疑問が浮かんでくる。グラゲ道路建設協会のメンバーは、なぜサバット・ベットの移民だったのか。都市のサバット・ベットの移民の間に、どのようなつながりがあったのか。当時既にグラゲという共通のアイデンティティをもっていた

だろう他地域出身者の間に、連携や追従の動きはなかったのか。そして道路建設協会のメンバーは、そもそもどのような動機でこうした活動を開始したのか。当時はエチオピア南部の他の民族でも似たような動きがあったわけだが、その背景は何か。そしてグラゲ道路建設協会と他の民族の組織の間には、何らかの影響はなかったのか。

そのほかにも、社会主義軍事政権時代の政府側勢力や、現政権時代の政府側勢力の人々の社会的背景についても、さらに突っ込んだ分析が欲しいところだし、グラゲ県から分離したスルテの人々の独立運動の背景には、グラゲ道路建設協会の活動が、たとえば道路建設による地域間の経済格差の増大といったようなものも含めて、何らかの影響をおよぼしていたのではないかという疑問もわいてくる。ここで分析されている事例が、非常に興味深いものであるだけに、より詳細な民族誌の情報が欲しかったところだ。

それでは、公共性という概念をキー・ワードにして、道路建設や葬儀講の活動を分析しようとする試みは、どれくらい成功しているのだろうか。冒頭に記したように、公共性という概念は、西欧の社会制度に根ざした概念であり、なおかつ一定の規範性を帯びた概念である。現在のアフリカのいくつかの地域のように、国家が国家の体裁をなさず、内戦や非人道的な人権抑圧が蔓延しているような状況では、このような概念が地域の将来の展望を語る際に、有効な枠組みを提示するかもしれない。だが他方で、この概念はアフリカの現実を分析する際には抽象度が足りず、うっ

かりするとプロクルステスのベッドよろしく、現実を概念に合わせて歪めてしまう恐れもあるだろう。

グラゲ道路建設協会の活動は、西さんが指摘するように、都市の市民社会と農村の支族社会をつなぐ新たな住民運動の一形態であり、大きな可能性に満ちたものに思える。またアジスアベバの葬儀講の活動を、常に内部と外部との境界を、排除と配慮の作業を通して、メンバー自体がコントロールしているという指摘も興味深い。だが本書で西さんが公共性という概念を用いたのは、住民運動の分析とエチオピア国家のあるべき姿を生産的な形で対話させようとしたからではないか。評者が思うに、この意図はやはり充分には達成されていない。

最も気になった点は、公共性という言葉で意味される内容が、文脈によって異なっている点である。たとえば現政権の民族自治政策をグラゲ道路建設協会の活動と比較している箇所では、明らかに、公共性は民主的で抑圧のない言説（あるいは政治）空間という意味合いで用いられている。だが他方で第1章では、公共性は『何らかの価値や規範を共有する人びと』あるいは『(何らかの行動のために)人びとを結びつける規範や集合的アイデンティティ』と定義されている。これは何らかの集団的活動を行なう人々（道路建設協会や葬儀講のメンバー）を定義するときには有効かもしれないが、排除のなさや抑圧のなさを特徴とする理念的な公共性の定義からはかけ離れているように思える。

このようになってしまうのは、(葬儀講は

いうにおよばず)道路建設協会の活動にしても、「対抗公共性」と呼ぶには、それにふさわしい特徴を充分には備えていないからではないかと思う。対抗公共性といった場合、従属集団の公共圏が支配的公共圏に何らかの影響をおよぼして、その関係を変化させていくということが含意されている。だがグラゲ道路建設協会の活動においては、国家の資源を巧みに流用はしているが、アムハラ中心の国家という公共圏と、グラゲという従属集団の関係を変化させるような活動はしていない。少なくとも、西さんの民族誌的な記述からは、それを読み取ることは出来ない。その溝を埋めることができないために、本書での「公共性」は、エチオピア国家のあるべき姿を論ずる理念的概念と、実際の運動を分析するための記述的概念の間を、揺れ動いているのではないだろうか。

本書は、エチオピアの住民運動を事例として、国家に抗する公共圏の創出という、きわめて今日的な問題を提起する、野心的な研究である。評者は本書を読んで、多くのことを学ばせてもらったし、また多くのことを考えさせられた。上記の指摘自体、本書のもつ問題提起の力の故出てきたものである。エチオピア研究者はいうにおよばず、アフリカの国家について関心をもつ研究者にとって、本書は多くの示唆を与えてくれるだろう。

引用文献

- Donham, D. and W. James. 1986. *The Southern Marches of Imperial Ethiopia*. Cambridge: Cambridge University Press.